

# COMBAT

# 武士道

BUSHIDO

## 特殊作戦群初代群長が COMBAT読者に送る大和魂

文：荒谷卓（明治神宮武道場「至誠館」館長） 撮影：横田 徹

## “戦う”ということ

### 意志を貫くための戦い

この雑誌の名称でもある「コンバット（戦闘）」つまり、戦うということを読者の皆さんはどのように考えているのだろうか。

ゲームとしての戦いであれば、TVゲームやサバイバルゲームそしてスポーツなどがある。実際の戦いは、金儲けの戦い、喧嘩、選挙戦から内戦、戦争等多様である。ゲームと実戦の違いは、戦うもの同士の間、妥協できない深刻な意志の対立が存在するかどうかだろう。

ゲームのように、そもそも意志の対立が無い場合、そのままでは戦いが生じないので、戦う必然性を作るためのルールが必要である。とくに、勝ち負けをあらかじめルールで規定しておかないと、戦いが成立しない。

視覚、聴覚、臭覚、皮膚……、あらゆる感覚を開放し、心と身体の手で環境を感じ取る。相手を捉え動作に入っても、感覚の開放は維持し続ける。その心身が出来て自然体といえる。





日本の武道の中にある「恐怖心に打ち克つ心と身体の鍛錬」が現代の戦士にとっても必要とされる。

では、実戦はどうか。戦いの目的は、自分と対立している意志を消滅させるか対立しない状態に変えることである。しかし、人の意志というのは変わりやすいため、戦わなくてはならない状態は長続きしない。夫婦喧嘩や友達との喧嘩などがいい例である。戦う必然性が常態化するためには、双方の意志が相当に強くなくてはいけない。

戦闘者は、この意志を守り抜くために戦うのだが、一般的には、同時に自分の肉体も守ろうとする。しかし、日本の武道では、意志を貫くためには肉体を捨てる。だから日本の侍は崇高で強いのだ。

## 犯罪者と戦闘者

余談になるが、片方だけが戦う意志を有し、そのターゲットになっている相手が戦う意志を持っていないケースは戦いとはいえない。象徴的な例が現代の日本人である。戦後の平和ボケした日本人は、自分が戦う意志を持たないことで戦いを避けようとしている。戦う意志が無いのだから、確かに戦いは避けられる。しかし、相手には確実にやられる。

犯罪には、そのようなケースが多い。加害者側が一方向的に殺意を持って、被害者はそれに対抗して戦おうとはしていないという状態である。つまり、犯

罪者（加害者）は、対抗して戦おうとはしないような人をターゲットにしているということだ。自分より明らかに弱く、追い詰めても絶対に反撃に出ない獲物を狙っているのだ。

ということは、この種の加害者は、そもそも戦闘者ではない。相手に危害を加えることには躊躇しないが、自分が被害をこうむることはいやなのだ。そうであれば、不当なる攻撃を加えようとする者には断固戦う意志を持ち、戦うための具体策をとることで、被害を受ける確率は減り、また、この臆病な犯罪者が犯行を企てることを抑制できるだろう。

残念ながら、戦う意志と能力を放棄すれば平和に暮らせるという憲法精神が各個人まで行き渡った日本の現状では、羊の群れしか襲わない臆病な犯罪者を思いとどまらせるのは難しい。

## 強い意志の下の団結

さて、話を実戦に戻そう。実戦では、まず、対立する意志の所在を突き止めなくてはいけない。1対1のような単純な対決構造は存在しにくい。肉体は共有できないが、精神は共有できるので、強い意志の下には精神を共有する集団が生まれる。また、有力な意志であればあるほど、1人の肉体の消滅は、時としてより強固な集団の意志として

広がりを見せることがある。

有力な意志とは、多くの人が共鳴できるような意志である。逆に、その意志が、きわめて個人的要求で誰が見ても正当性が無い場合は、その人間の肉体とともに永久に葬り去られることになる。

したがって、意志が強固で普遍性がある人間は強い。肉体が強いかどうかではなく、精神が清純で強ければ、肉体が減しても、その精神に共鳴した者たちにとっては神のような存在と化する。このような精神力に対して、物理的な戦闘力には、戦いのツールとしての限界がある。

では、どうするか。対立する意志の核心を突き止めたら、その意志が他に広がらないようにする。あるいは、相手の意思の普遍性・正当性を歪曲して伝え、地に貶める。そうして、精神の伝播と継承を阻止して同調者を限定していく。同時に、自分の意志の普遍性と正当性を敵方の人々に広めるようにする。いわゆる心理戦だ。

## 歴史的な心理戦の成功例となった戦後日本

この心理戦の最もいい例が米国の占領下にあった日本である。日本の精神的な核心は言うまでもなく天皇陛下である。終戦間際、日本人は、米軍の無差別





真剣での立ち合いは斬る寸前で剣を止める実力がお互いに必要とされるのは当然のこと、いかなるアクシデントが起きようと両者がそれに対応できる心身を持っていないといけない。戦闘技術ではなく戦闘精神を身に付けるには、真剣での稽古のような緊張感が必要とされる。



相手の動作を捉え、膝抜きにより相手の線上に身入し、平抜きにした剣で相手の剣と体幹を制する。

攻撃によって多大なる損害をこうむっていたものの、連合軍に抗戦する精神はむしろ強固になり、日本の正義を貫くため一億玉砕はみな覚悟をしていた。

さらに、ルバング島で30年間ゲリラ戦を繰り広げていた小野田少尉と同じ中野学校戦士200人以上が本土での遊撃（ゲリラ）戦を準備していたから、そのまま本土戦に持ち込めば、ベトナムやアフガンのような勝利は、まず日本でおきたであろう。

しかし、精神的核である天皇の命により日本人は戦闘をやめた。

その後、7年間にわたるGHQの完全なる情報統制と言論弾圧が断行され、日本の正当性を記した全ての出版物は、発禁、没収、廃棄された。

さらに、GHQが、そのような情報統制と言論弾圧をしているということを直接的にも間接的にも日本国民に知らせる報道や言動は検閲をうけ、厳しく取り締まられた。

GHQの占領終了後も現代に至るまで、日本の教育とメディアは、GHQの心理戦を引き継ぎ、日本の正義は歪曲され歴史は塗り替えられてしまった。

心理戦には巧妙な罠と時間が必要である。露骨にしかも強制的に人々の精神を圧迫していたソビエトの占領政策

は失敗し、占領下にあった人々はそれぞれ自分のアイデンティティを取り戻した。しかし、日本の占領者は、天皇陛下に下手に手を出せば、日本人はより強固な精神で戦闘を再開することをよく理解していた。

米国の占領政策と戦後政治は、日米間の密約により、米側の強行な要求が常に国民の目に映らない影の部分で進められたので、日本人は自分がマインドコントロールされていることに気がつかないまま、60年以上の期間を経て完成しつつある。

これは、まさに歴史的な心理戦の成功例である。終戦時、日本人は、天皇陛下の命で自ら武器を捨てたが、意志の面で負けてはいなかった。日本人が真に敗れたのは、この心理戦により、自らの正当性を放棄することになった戦後である。

中国もチベットや東トルキスタン（新疆ウイグル）では同じようなことを考えている。民族の歴史を消去し、地球上にチベットや東トルキスタンという国も民族も存在しなかったことにするというものだ。

中国にかかれば、そもそも日本などという国家は歴史上存在せず、そのう



ち東京は、トンキン（東京）という昔から中国にあった都市として教科書に載るだろう。実際には、その前に、ファー・イースト州に向かっているのだが。

## 集団実戦での勝敗

さて、戦いは、意志が対立している当事者間に起きているが、戦いの結果には、当事者以外の第3者の力が働く。

第3者は、どちらに正当性があるかと観察するだろうし、どちらが勝ったほうが自分の利益になるだろうかと考えるかもしれない。そして、時として、この第3者の力が勝利を決定することもある。だから、戦う前、そして戦っている間は、常に有力な第3者の心の動きに注目しなくてはならない。

こうした目に見えない戦いの皿の上で、物理的戦いが展開される。実戦は、ゲームと違って、何を持って勝ち負けとするかは、戦う当事者が決めなくてはならない。また、自分が勝ったと思っても、相手が負けたと認識せず、敵対する意志を持ち続けていれば戦いは終わらない。だから、集団での実戦では、格闘技のように相手をKOしても終わらないし、殺傷しても決着はつかないことが多い。

そういう意味で、ゲリラ戦や抵抗活動の最初の目標は、負けないことである。妥協できない意志を持つ相手に対する敵意を継承し、伝播拡張するのが初期の戦略となる。

もちろん最終的戦略目標は、自分の意志を通し敵対する意志を消滅あるいは変質させることである。これを踏まえて、物理的な戦いの方法を考えなくてはならない。それが戦術である。

戦術は試行錯誤だから当然失敗はある。一度成功した戦術だからといって二度成功するとは限らない。戦術はどんどん改良を重ねる。昨日と同じことを今日やっているようでは、お先真っ暗である。最も重要なのは、戦略が途絶えないことだ。

## 特殊作戦戦士

戦略目標を直接遂行するため各種戦術を創造し実行するのが特殊作戦で、それを遂行できる意志と能力を有する者が特殊作戦戦士だ。その戦術遂行に



明治神宮武道場「至誠館」では素手、木刀、真剣と日々厳しい稽古が行なわれている。心は適度な緊張を保ち、身体は逆に緊張を持たせない……。そういった「心と身体」の鍛錬が重要だという。

適した組織と装備を作れば特殊部隊となる。

したがって、何がよい編成なのか、どれがよい武器なのかは、戦略と戦術を踏まえて、作戦を実行する者が決める。カタログのスペックで武器の良し悪しが決まるわけではない。

戦略目標達成のため活動するには、その戦略により達成しようとしていることが自分の価値観と一致しないといけない。したがって、特殊作戦に従事している本物の特殊作戦戦士は、作戦の戦略目的と自分の人生の目的が同一化する。

例えば、この本の読者であれば誰もが知っているであろう三島瑞穂さんがいい例である。三島さんは、退役後亡くなるまで、不変の価値観とそのため生きる強い意志を持っていた。その価値観と意志は、彼が特殊作戦戦士として作戦に従事していたときとなら変わることはなかったろう。そのために生きているのだから、その作戦に従事するのは彼にとって必然であったろうし、そのために死んでもまったく悔

いることはなかったはずだ。惜しむらくは、三島さんは、本来その忠誠を祖国日本に捧げたかっただろうということだ。

## 大和魂の継承

私は自衛隊を退官したが、私の価値観や意志は、なにひとつ変わってはいない。自衛隊に入る前から、祖国日本のため「七生報国」を誓って生きようとしているのであって、その目的達成のため最適の仕事をする。それだけだ。もちろん、祖国日本とは、非占領下の日本ではない。神武天皇建国以来、幾多の日本人が命を捧げてかたちづくり、そして守り抜いてきた大和魂を引き継ぐ日本人の社会である。

魂を守るのだから、くだらない政治家や経済人に期待するものではない。自分がその魂を引き継ぎ守ることを決めればいいだけで、決して難しいことではない。

願わくは、この記事を読んでくれる読者の中に、志を同じくする盟友がいて、共に日本の戦闘者としての人生をまっとうすることである。

### 荒谷 卓(あらや・たかし)

昭和34年、秋田県生まれ。昭和57年陸上自衛隊に入隊。福岡19普通科連隊、調査学校、第一空挺団、弘前39普通科連隊後、ドイツ連邦軍指揮大学留学。陸幕防衛部、防衛局防衛政策課戦略研究室勤務を経て、米軍特殊作戦学校留学。帰国後、編成準備隊長を経て特殊作戦群初代群長となる。平成20年退官。1等陸佐。平成21年、明治神宮武道場「至誠館」館長に就任。

日本の大義と武士道  
荒谷卓  
戦う者たちへ

特殊作戦群初代群長  
若きサムライたかしの輝く  
戦術と戦術の心  
空想を捨て、  
自己の価値観を追求し  
平らな道に歩む。  
己の理想を、ついでに。

「戦う者たちへ  
～日本の大義と武士道～」

荒谷卓 著

価格：¥1,575 (並木書房)